HOW TO READ BUSINESS NOVELS

経済小説の読み方

この200冊から何を学ぶか

佐高 信

経済小説の三つの効用

テーマ・業種別読書案内

—日本経済の仕掛人たち

—国際経済と商社マンの世界

—銀行のしくみと銀行マン

—自動車業界と情報戦争

—エネルギー危機の時代etc.

この企業、このモデル35例

四人の経済小説家論

—城山三郎・山崎豊子

—清水一行・森村誠一

こう書房

KOU BUSINESS

NOVEL

経済小説の読み方

この200冊から何を学ぶか

佐高 信

こう書房

佐高　信（さたか・まこと）

1945年山形県酒田市に生まれる。67年慶大法学部を卒業し，山形県立庄内農業高校教諭となる。70年酒田工業高校に転勤。72年教職を辞して上京。月刊誌『現代ビジョン』の編集長となり，現在に至る。

著書に『ビジネス・エリートの意識革命』（東京布井出版）がある。思想の科学研究会会員。

経済小説の読み方

●この200冊から何を学ぶか

© M. Sataka　1980

KOU BUSINESS

昭和55年1月19日　初版発行

著　者　佐　高　　信
発行者　鵜　野　健　二

発行所　こ　う　書　房
東京都千代田区飯田橋 3-7-7(第2林ビル)
電話03(263)3803(代)
振替東京 6—33738
印刷所●清和印刷／鴨志田印刷
製本所●共栄社製本

定価　980円　0030-011053-2473
落丁乱丁本はお取替えいたします

経済小説の読み方――

はじめに

私が二年余り前の一九七七年秋に出した『ビジネス・エリートの意識革命』（東京布井出版）は、副題を「企業人の面とペルソナ」としたが、「最近では珍しい本格的なサラリーマン論」（読売新聞）、「身近に自分と会社との関係が考えられる」（朝日新聞）、「日常への新鮮な刺激剤」（日本経済新聞）等々の過分な書評で迎えられた。

『サンデー毎日』の書評子によれば「平易な論述の中に十分な説得力を持ちえているのは、著者の視点が鮮明だからだ」という。

『週刊東洋経済』の一九七八年四月八日号「フレッシュマンに読ませたい本」では、日本証券経済研究所の奥村宏さんが「ビジネスマンの本当の姿が書かれている」として推薦してくれ、同じく「学生時代に考えてきたことと企業生活の現実とをつないでくれる回路として」横浜国大教授の岸本重陳さんも推薦してくれたので、「二人以上の推薦があった本」として、山本七平やガルブレイスの本とともに別掲されることになったが、とくに奥村さんの評は面映ゆかった。

しかし、幾分でも「ビジネスマンの本当の姿」が描かれているとすれば、それは私がこ七年間ほどの間に読んだ二百冊余の経済小説のおかげである。

七年前まで、故郷の山形県酒田市で高校の教師をやり、生きた経済の実態をほとんど知

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

らないままに経済雑誌の編集に携わることになった私は、手っとり早く企業や日本経済の生態を知るために、城山三郎、山崎豊子、清水一行、森村誠一、アーサー・ヘイリー等の小説を片っ端から読んだ。それは、同時に読んだ学者やジャーナリストの書くものより、ずっとおもしろく、またナマナマしかった。

そこには、生きている人間が動かしている生きている企業を、生きているままにとらえようとする「作家の眼」が光っていたからである。

事実をただ積みあげても「真実」はとらえられない。「事実は小説より奇なり」とも言われるが、「真実は虚構を通してのみ語られる」とも言えるのである。

ここでは私なりの「経済小説の読み方」を披露し、カタログを添えて「経済小説への道案内」をつとめようとした。

このテーマの〝出題者〟であり、執筆にかかってからも、実に的確に尻を叩きつづけてくれた荘司君によれば、この本でとりあげた経済小説家は約七十名、経済小説は約二百冊（それ以外の本をふくめると二百三十冊）であるという。その若い友人、荘司君と、著者の名前で売ることは望めず、「内容」で勝負するしかない私の本に賭けてくれた鵜野社長に深く感謝したい。あとは、この本が多くの読者を獲得することを祈るだけである。

一九八〇年一月一日　　　　佐高　信

経済小説の読み方★目次

はじめに

二—三

第一章　経済小説はなぜ読まれるか

九—四四

一、経済小説の三つの効用……10
問題の立体的見方を知る
ビジネスマンの生き方を問う
モデルを知って「実物」探究
「壹岐正」の国際情報の見方
二、経済小説を書く苦労……22
作家・城山三郎の〝誕生〟
吸血鬼的取材をする山崎豊子
初めに人間ありき
「主人公の職業をかえてくれ」と言ってきたテレビ局
『小説新日鉄』の場合
小説を書いて降格された渡辺一雄
三、どんな経済小説が読まれているか……37
断然トップの城山作品
主婦たちが経済小説を読み始めたら…

第二章

テーマ・業種別読書案内

四五―一五三

一、日本経済の仕掛人たち……46

〝ミスター・通産省〟の栄光と挫折
モデルより強烈な佐橋の個性
日銀を舞台にした大ロマン
官僚と政治家と国民の関係

二、国際経済と商社マンの世界……57

迫力ある『一九七九年の大破局』
秀作『真昼のワンマン・オフィス』
『不毛地帯』から『毎日が日曜日』まで
キラリと光る『雑草の花』

三、銀行のしくみと銀行マン……71

銀行が「主人公」の『マネーチェンジャーズ』
迫力不足の山田智彦たち

四、「狼型人間」の集まる証券業界……78

清水一行が「兜町小説」の第一人者
〝最後の相場師〟のケタ外れのスケール
無責任経営生む法人株主の増大

五、企業の合併、乗っ取り、倒産……88

問題は合併後の主導権争い
従業員の反対でつぶれた関西相銀の合併

野良犬呼ばわりされた『乗取り』の主人公
『虎と狼』の乗っ取り争い
「企業スリラー小説」の『銀行乗っ取り』
さまざまな「倒産劇」の内幕
六、自動車業界と情報戦争……………106
花形産業の舞台裏
古典ともいうべき梶山の『黒の試走車』
七、公害問題と企業批判……………114
『辛酸』の田中正造と『四阪島』の伊庭貞剛
新幹線公害を告発した『動脈列島』
八、エネルギー危機の時代……………122
『油断!』ショックとその功罪
『原子力戦争』と『エネルギー』のコントラスト
九、構造汚職と企業の暗部……………131
デビ夫人から訴えられた梶山の『生贄』
総会屋という〝職業〟
一〇、サラリーマン小説とさまざまなサービス産業…140
「昔、源氏鶏太。今、森村誠一」
『企業特訓殺人事件』の戦慄
中間管理職の哀歓を描いた人事小説
デパート、生保、ホテル、病院など

第三章 この企業、このモデル 一五五—二〇一

一、モデル小説一覧……156
「企業」が主役のモデル小説
「事件」が主役のモデル小説
「人物」が主役のモデル小説
城山三郎の痛烈なヘイリー批判
二、『価格破壊』のダイエー、中内㓛……168
流通革命に毛沢東思想を生かす
流通大陸の暗黒に挑んだ〃攻撃型経営者〃
遊びを知らぬ勉強人間
三、『風雲に乗る』の日本信販、山田光成……175
「信用革命」の旗手の教祖的魅力
「勤続十年妻子あり」
「信ずる者は信じられる」
四、『役員室午後三時』と『鐘の鬼』の鐘紡、伊藤淳二……181
「落日の経営者」から「明日の経営者」への新旧交替劇
鐘紡を蘇生させた起死回生の大手術
企業運命共同体論者
五、『天井知らず』と『大将』の佐世保重工、坪内寿夫……187
踊り出た〃四国の大将〃
「再建の神様」早川種三と坪内の違い
強硬策が惹き起こした摩擦

六、花王石鹸の『男たちの経営』……194
企業経営の生きた教材
丸田芳郎という男
「総会屋排除」の弁

第四章

四人の経済小説家論

［城山三郎　山崎豊子
清水一行　森村誠一］

二〇三―二三八

一、男のロマンを描く城山三郎の原点……204
詩人としての出発
戦争の中の青春
『辛酸』と『落日燃ゆ』の間
律儀者を愛す
二、山崎豊子が描く悪人の魅力……218
好きな作家は徳田秋声とバルザック
大阪おなごのド根性
「盗用」事件について
三、企業内幕小説のパイオニア、清水一行……226
企業のフィクション性を描いた『虚業集団』
『燃え尽きる』にみる牧田与一郎父子
『奔馬の人』でなくしたキバ
四、森村誠一の屈辱のホテルマン体験……232
蓄えられた十年間の怨念
梶山季之との出会いとデビュー
森村誠一の不安と驕り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章——

経済小説はなぜ読まれるか

（一）経済小説の三つの効用

問題の立体的見方を知る

一九七九年五月二十日付で二十五刷を出している山崎豊子の『不毛地帯』（新潮社）第二巻に次のような場面がある。

エール・フランスでカイロから羽田空港に着いたインドネシア華僑の黄乾臣を出迎えた東京商事の鮫島辰三が、

「それにしてもカイロから東京にはＪＡＬやＰＡＮＡＭの便も飛んでいますのに、一番不便なＡＦとは意外でございましたよ」

というところである。

そして、しつこい鮫島を追い返した第二夫人の紅子に黄は、

「あの鮫島さんは大へんなビジネスマンだよ、私がＪＡＬやＰＡＮＡＭに乗らず、南廻りのＡＦに乗って来たことを確めただけでも、彼にとっては大きな収穫だと思う」

と言って、次のように解説する。

「以前、イスラエルとシリアで小ぜり合いがあった時、シリアの空軍がＰＡＮＡＭを拿捕し

かけた事件があったんだよ、イスラエルに軍事援助しているアメリカの航空会社や、中東紛争に中立とはいえ、アメリカ寄りの日本の航空会社は、そういう意味でいつ、アラブの標的になるかもしれないが、フランスならアラブとイスラエル両軍に武器を売っているから、危険は少いわけだ。鮫島さんは私がエール・フランスに塔乗したことで、両国間の緊張が相当高いことを感知したはずだよ」

国際情勢の変動について、ユダヤ人はラジオニュースの符牒を使い、華僑は電話を使って、世界各地に散らばっている彼ら独特の組織を通して情報を流し、その速さは、一にユダヤ、二に華僑、三に日本の商社だといわれているというが、山崎豊子の徹底した取材に基づくこうした描写によって、私たちは、問題の所在を知り、その見方を教えられる。

政治、経済、宗教、そして文化のからみあったこの中東問題に象徴されるように、経済はあくまでもポリティカル・エコノミイ（政治経済）なのであり、「政経分離」ではとらえられないのである。

「経済小説への興味」としては、私は、

。問題への興味

。生き方への興味

。モデルへの興味

の三つがあると思うが、私たちは優れた経済小説によって問題の立体的見方を知ることがで

きる。

たとえば森村誠一の『幻の墓』(実業之日本社)は、小説の出来としては必ずしもよくないが、非常に優れた「商法各論」であり、商法学者の書いた固い解説書より、ずっとわかりやすい。だから、勉強の順序としては、まず、『幻の墓』を読んでから、商法の解説書を読んだ方がいいのではないか、と言いたくなるほどである。

このように、問題を生きたままにとらえるということが、経済小説の第一の効用であろう。

ビジネスマンの生き方を問う

第二に、経済小説は、それを読む人間に、登場人物と自らの生き方を比較させる。経済小説に限らず、すべての小説がそうだとも言えるが、経済小説は身近なビジネスマンを描くことによって、とくにそれを迫るのである。

たとえば、前記の『不毛地帯』の東京商事航空機部長、鮫島辰三は三十八歳にして五菱商事、五井物産、丸藤商事、近畿商事の上位大手商社の航空機部長を向うにまわして辣腕を振い、総合的な商社のランクからいえば六位だが、航空機にかけては一頭地を抜く地位を築きあげて〝空のギャング〟と怖れられている。しかし家にも二台の電話を置いて夜遅くまで電話をするモーレツ商社マンで、「元大使令嬢」の夫人から、

「あなた! いい加減にしてよ、朝は八時に出勤、夜は十一時過ぎに帰宅するなり、国際電

話、オフィスとプライベートな生活は、きちんと別けて戴きたいものだわ」

と言われ、

「まあ、そう云うなよ、急なことが起ったんだし、何も夜中に三十分おきに電話がかかるという程のものじゃないし——」

と言い訳して、

「三十分おきでなければいいとおっしゃるの、そんなにしなくては偉くなれないのなら、ならなくて結構よ、家へ帰って着替えもせずに、電話にしがみついている姿ったら、みっともなくて、ほんとうに商社マンなどと結婚するんじゃなかったわ！」

と決めつけられるのである。

この鮫島は週のうち二日は午前六時半に家を出て、これと狙った与野党の実力政治家の自宅廻りをする。日中はなかなかつかまらない花形代議士や、東京商事の夜の接待など見向きもしない閣僚クラスの大物も、朝なら大抵、気軽に会うことが出来るからであるという。

「五十三歳にしてなお睡眠時間、僅か四、五時間でダウンせず、精力的に行動出来るのは、いつ、いかなる時でも、すぐに眠れる特技のせいであった」と、著者は鮫島を描写している。

こうした鮫島の生き方を肯定するのか、否定するのか。肯定するとしたら、その何を肯定し、否定するとしたら、その何を否定するのか、極めてえげつなく描かれた鮫島の生き方を突きつけられて、読者は選択を迫られるのである。

同じモーレツ商社マンの妻の空洞に焦点を当て、テレビ化もされて評判となった山田太一の『岸辺のアルバム』(東京新聞出版局)も、そういう意味では一種の「経済小説」として見ることもできるが、山田太一は『男たちの旅路』(日本放送出版協会)第Ⅱ部の「廃車置場」というシナリオでは、警備会社に入社するのに「条件」をつける青年を描いている。偶然の一致だが、同じく鮫島というこの青年は、

「できるなら仕事を選びたいんだ。納得できる場所を警備したい。命令されれば、なんでも守るというような仕事はしたくない」と言う。

それを支持したい吉岡は会社の幹部会議で、上からの命令は絶対とすべきだ、応募者はいくらでもいるんだから命令を黙って聞けない人間は採用しなければいい、という大沢と対立する。そして「命令を黙って聞く人間しかやとわんというのは情けなかないか」と問いかけ、「こんなことを言い出して来たのは、彼だけなんだから、言い出して来た人間ぐらい、選ばせてやる(警備する場所を)くらいの柔軟性が、会社にあってもいいでしょう」と主張するのである。

これは結局、小田社長の、

「いいでしょう。会社の包容力テストとしてやってみようじゃないですか」という言葉でケリがつくのだが、「企業と人間」の問題について、かなり重要な問いかけをしているのではないだろうか。

『男たちの旅路』まで「経済小説」に入れると、広がりすぎて収拾がつかなくなってしまう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co